

### ○13時20分～14時 ワークショップ1

ワークショップ1では、廣口知世会員に、説明的文章教材「おにごっこ」（小学校2年）をもとに、学習者の側に意味的＜対話＞がおこるような授業づくりの実際について語っていただきました。それをもとに低学年の説明的文章の授業づくりについて参加者の皆さんと意見を交流しました。

廣口会員の「＜対話＞のある授業づくり」の特徴は以下の点にあります。

本教材は、「おにごっこには、さまざまなあそび方があります。」という説明に対して、「どんなあそび方があるのでしょうか。」「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」という二つの問いを立てて、結論部分である第6段落「このように、おにごっこには、さまざまなあそび方があります。おになった人も、にげる人も、みんなが楽しめるように、くふうされてきたのです。」へ向けて、くふうの順序性の論理によって構成されています。

2年生の子どもたちは鬼ごっこを生活の中でたくさん体験しています。しかし、本教材の上記のような筆者の見方・考え方・述べ方に子どもたちを出会わせ、＜対話＞を引き起こすようにするため、以下のような工夫が必要でした。

①「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」の問いに対する理由に気づかせたい。

そのために、この理由を書いていない文章に出会わせ、子どもたちなりの理由を考えさせる。

②子どもたちなりの理由を考えたプレテキストを持って教材文に出会わせる。

③子どもが気づかない第5段落の意味に気づかせるために、第5段落は要らないのではないかという2年生なりの批評読みを行わせる。

こうした＜対話＞を生成させるための手立てがどのように学び手である2年生に＜対話＞を生成していくことができたのか、参加者の皆さんにも授業の一部を体験していただきながら、低学年における説明的文章の学びにおける＜対話＞のある授業づくりについて考え合うことができました。教師の子どもたちに対して対話が引き越される工夫によって2年生の子どもが活発に他者と筆者と対話し、自己内対話を引き起こしている様子がよく伝わってきました。

### ○14時～14時40分 ワークショップ2

ワークショップ2では、河野が、説明的文章教材「インターネットでつながる」（小学校5年）をもとに、学習者の側に意味的＜対話＞がおこるような批評読みとその交流についてワークショップを行いました。そして、それをもとに高学年の説明的文章の授業づくりについて参加者の皆さんと意見を交流しました。

すでに河野は、どのようにすれば批評読みを学習者の側から実現できるのか、メタ認知的知識（条件的知識）の育成という観点から考察しています（河野2015）。

本ワークショップでは、「インターネットでつながる」という文章と出会った高学年の子どもが＜対話＞を生成させるために、次のような工夫を行うことにしました。

- ①「インターネットでつながる」は、子どもたちが既習教材の「すがたを変える大豆」（3年）、「アップとルーズで伝える」（4年）で学んできた論理構造が含まれている。こうした既習事項を子どもが活用して読み取りを行うことができるように、本教材との出会いの前に、「説明的文章のプロになろう」という単元名を設定し、それぞれの論理構造について想起させておく。
- ②「インターネットでつながる」という文章と出会ったとき、どの学習者にも論理構造に関する〈対話〉が生成されるように、次のような段階を踏む。

本教材では、第10段落の結論部分へ向けて、インターネットの良さを第5段落から7段落まで説明して、第8・9段落で「インターネット」の危うさを説明するという対比の構造を読み取る必要がある。この構造を読み取れなければ、結論部分の筆者の主張を理解することが難しい。そこで、まず、第8・9段落を省いた文章と子どもを出会わせ、「筆者の主張」に納得できるかという批評読みを展開したあとに、全文を見せて、改めて筆者の主張に納得できるかを考えさせることにする。

批評読みとその交流が子どもたちの中に引き起こす対話の可能性を見いだすことができました。

#### ○14時50分～15時30分 ワークショップ3

ワークショップ3では、対話のある授業づくりを目指しながら、なかなか対話にならないという悩みを抱えている中学校現場において、学習者の側から意味的〈対話〉を引き起こしている長元尚子会員に、中学校3年の「故郷」（魯迅）をもとに、授業づくりのポイントを語っていただく。それをもとに中学校の文学的文章の授業づくりについて参加者と意見を交流しました。

〈対話〉を引き起こすためのポイントは、教科内容である知識・技能をいかに生徒が使えるものにするのかという工夫と、「根拠－理由づけ－主張」の三点セットによる論理的思考力の育成が、どのように学ばよいかという思考方略として働いていることです。

ワークショップでは、「故郷」をもとにしながら、公立中学校において生徒たちがどのように知識・技能を獲得していったのか、そのために既習教材をどのように活用させていったのか、さらに、どのように生徒たちが「根拠－理由づけ－主張」の三点セットを意識し、活用しながら〈対話〉を引き起こしていったのかについて、参加者の方々にも実際に体験していただきながら、中学校における〈対話〉のある学びのあり方について議論を深めていきました。公立校の子どもたちの発言の質の高さに賛嘆の声があがっていました。